文化財ミニ展示⑨

米づくりの始まりを告げる土器

― 円田盆地の弥生～古墳時代 ―

米は、私たち日本人の暮らしに欠くことのできない食料資源です。町の大部分を山地が占める蔵王町でも、新田開発や用水の整備によって円田盆地や松川沿いに美しい水田地帯が広がり、梨や桃などの果樹生産と並ぶ主要な産業として米づくりが盛んに行なわれています。

町内で最も古い米づくりの痕跡は、円田盆地北部の都遺跡で発見されています。今から約 2,000 年前、弥生時代中期の土器片の表面に、米の籾殻が押し付けられた痕跡（籾痕）が残されていたのです。当時の集落の中に「米」があったことを示す確かな証拠です。

円田盆地周辺は、この時期の遺跡が集中する地域として広く知られています。かつて西浦遺跡で出土した弥生土器の壺（右下写真）は、宮城県周辺の弥生時代中期の典型的なデザインの土器として認識され、蔵王町円田の地名をとって「円田式土器」と命名されました。この時期特有の均整の取れた長頸壺には、赤い顔料で彩色が施され、特別な用途の土器であったと考えられます。大切な稲の種籾を保存したり、豊穣を祈る儀式やまつりで用いられたものかもしれません。

当時の水田は、丘陵に挟まれた小さな谷の底面や扇状地に小さな区画を連ねた「棚田」に、谷の奥の湧き水を引き込んで利用するものでした。円田盆地東縁の丘陵麓には、小さな丘の張り出しと谷がいくつも連なり、このような初期の水田を営むのに最適な条件を備えていたのです。

円田盆地南部の台遺跡では、弥生時代に遡る可能性のある水田跡とともに、古墳時代から平安時代にかけて水路や畦畔を改修しながら何世代にもわたって継続的に営まれた水田跡が発見されています。

田植えの季節には残雪の美しい逆さ蔵王を水面に映す円田盆地。そこには、現在の蔵王町の産業や暮らしにつながる米づくりの長い歴史が息づいているのです。

西浦遺跡出土　円田式土器（長頸壺）
（東北大学蔵，東北大学総合学術博物館に展示）